

〔特産化を目指したカキ新品種の栽培指針確立〕

カキ‘東京紅’の結果母枝長および結果枝上における結果位置が果実品質に及ぼす影響

菊池知古・近藤 健・矢沢宏太^a

(生産技術科)^a 江戸川分場

【要 約】30～59cmの母枝を残し、1～3の結果枝の最下位節の花を残すようにすることで、比較的高品質で果重の重い果実を生産できることが示唆された。長い結果母枝を残す場合には、第7節以下の低い節位には着果させないことが望ましい。

【目 的】

当センター育成の新品種‘東京紅’は、カキに対する新たな需要を喚起できる有望品種である。しかし、‘東京紅’の普及・定着に際して不可欠な栽培指針は未確立であり、他品種の事例準用で対応しているのが現状である。そこで、技術的に未解明な、剪定時および摘蕾・摘果時の注意点を明らかにした。

【方 法】

場内灰色低地土圃場の‘東京紅’6樹を用いた。受粉樹は場内の‘禅寺丸’とし、放任受粉とした。摘果程度は葉果比に基づいて行った。果頂部が農林水産省果樹試験場基準カキ果実カラーチャート(以後cc)値8.0の時収穫した。果実品質などの調査方法は、全て落葉果樹系統適応性検定試験調査方法に準じた。試験規模は表1に示した。

【成果の概要】

- 1) 剪定時に残した結果母枝長と、その結果母枝から収穫された果実の一果重および糖度の関係を見ると、年次にかかわらず結果母枝長による有意な差は認められなかった。しかし、30～59cmの結果母枝の果実が、一果重が重く、糖度が高い傾向にあった(表2)。
- 2) 2006年の、結果枝の着果節/総着蕾数と、一果重(g)およびへたすきの関係を見ると、3個の着蕾があり、その内中央の花を着果させた「2/3」では、一果重が大きいへたすき発生程度が高く、「1/4」ではへたすきの発生程度は他に比べ有意に小さかったが、一果重が低い傾向にあった。「1/1, 2/2, 3/3」は一果重が大きくても比較的へたすき発生程度が小さい傾向にあり、「1/2, 1/3」は一果重が小さくても比較的へたすき発生程度が大きい傾向にあった(表3)。
- 3) また、2006年の早期落果・後期落果の状況を見ると、「1/4」で早期落果が、「1/3, 2/3」で後期落果が高い傾向にあった(表3)。
- 4) 着果母枝上の着果枝位置と、その着果枝から収穫された果実の一果重および糖度の関係を見ると、2006年は、着果枝節が7・8と低い場合に有意に一果重が小さくなった。着果枝位置による果実の糖度は、年次にかかわらず有意な差は認められなかった(表4)。
- 5) 以上2年間の測定結果では、‘東京紅’は特異的な栽培管理は必要としないが、結果母枝の剪定時には長さが30～59cmの母枝を残すようにし、摘蕾では着蕾数が1～3の結果枝の最下位節の花を残すようにすることで、比較的高品質で果重の重い果実を生産できる可能性がある。また、長い結果母枝を残す場合には、母枝先端から見て第7節位以下の低い節位に着果させると、果実品質の低い果実になる可能性がある。

表1 各項目別の試験供試数

	結果母枝	着果させた結果枝	摘蕾後花数	調査果数	
				一果重	糖度
2005年	124本	472本	313花	87個	28個
2006年	149本	430本	306花	103個	97個

表2 結果母枝長と一果重および糖度の関係

結果母枝長	一果重 (g)		糖度 (Brix%)	
	2005年	2006年	2005年	2006年
	29cm以下	273.5	273.8	17.0
30~59cm	276.7	273.7	17.2	17.6
60~89cm	264.5	268.6	16.6	17.1
90cm以上	—	255.4	—	18.9

表3 着果節/総着蕾数が一果重, へたすき, 落果率に及ぼす影響(2006年)

	着果節/総着蕾数 ¹⁾						
	1/1	1/2	2/2	1/3	2/3	3/3	1/4
一果重 (g)	267.7	265.9	275.7	265.7	285.0	275.5	260.3
へたすき ²⁾	1.41bc	2.37ab	2.26abc	2.29ab	2.75a	1.85abc	1.00c
早期落果率(%)	9	6	5	5	8	0	24
後期落果率(%)	34	33	23	50	59	32	11

表中の異なるアルファベット間には5%水準で有意差あり (TukeyのHSDによる)

1) 図1参照

2) 発生程度4段階 (へたすき無し: 0, 微: 1, 小: 2, 大: 3) の平均値

表4 結果枝位置と一果重および糖度の関係

結果枝節位 ¹⁾	一果重 (g)		糖度 (Brix%)	
	2005年	2006年	2005年	2006年
1	268.6	270.5 ab	17.4	17.8
2	275.3	284.1 ab	18.0	16.9
3	293.7	260.7 ab	16.6	16.5
4	268.8	290.2 a	17.0	17.4
5	273.4	269.1 ab	18.0	17.1
6	283.5	267.5 ab	16.3	17.7
7	289.5	252.7 b	15.6	17.2
8	—	249.1 b	—	19.2

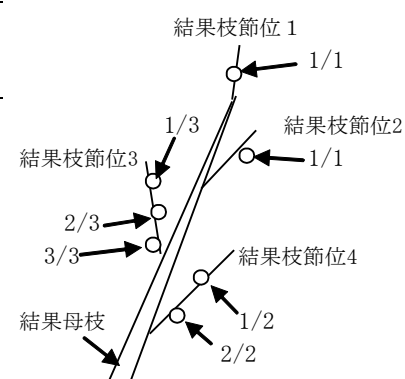


図1 結果節/総着蕾数および着果枝節位

分散分析: TukeyのHSDによる。a, bは, 5%で有意差あり。

1) 図1参照